

降三世会の四大明王を巡って

小峰 彌彦

はじめに

事相・教相は車の両輪にたとえられ、これらが真言宗を成り立たせる根幹であることは論をまたない。とりわけ事相は修行と深く関連し、真言行者の宗教体験の伝承などを含むものであり欠くことのできないものである。それ故事相として伝統的に継承されてきたものは権威とされ、むやみな解釈は暗黙のうちにご法度とされてきた。もちろん深い宗教体験を伝えること自体は極めて意義のあるのだが、それ以外の教理教学に触れる部分でも伝統という権威が覆っていることもある。しかしそれがあまりにも優先すると、かえって真言宗の大切なものさえ見失ってしまうことになる。従って事相の問題といえども必要であれば、再考し明確にすることは決してはならぬものではない。むしろこれらの作業が真言密教の現代化というテーマに僅かながらも寄与することと思うのである。

さてここで取り上げる問題は、大きく言えば弘法大師以降、密教を学ぶ先徳が如何に真言宗を捉えてきたのかを一つの視点とする。具体的には曼荼羅に関する問題を指摘しその問題を先徳がどのように理解してきたかを整理・検

討することであり、ここでは金剛界曼荼羅降三世会の四大明王を取り上げる。

一

曼荼羅に描かれる諸尊は、教理に則り整然と配置され一見何の問題も無いように思われる。しかし実際に現図曼荼羅などを見ると、經典の記述と異なったり、あるいは經典に説示されていない尊像が描かれていたりしている場合も、少なからずある。この小論で問題とする金剛界曼荼羅の降三世会の最も外側の四隅に描かれる尊像もその一つである。⁽¹⁾すなわちこの四隅は四大明王を描くと伝えられているが、実際にこの四隅に描かれた尊像を見ると、ある曼荼羅では四大明王が描かれ、またある曼荼羅には女尊が配されているなどの相違がある。しかも、同じ四大明王と総称しても、四大明王の尊名も必ずしも一致せず移動が見られる。

もちろんこの問題は今新たに持ち上がったものではなく、すでに古くから指摘されていたものである。たとえば元杲(911-985)は『金剛界密記』において、金剛界曼荼羅・降三世会を説明する中で、「但し、この会に未決のことあり。曼荼羅外院天等の位の四維にそのことあり。後の賢者は尋勘して之を存すべきなり」との問題を指摘している。そこで古来より問題とされてきた降三世会の四隅の四大明王とされる尊像について、何がどのように問題なのか、諸説を拾い上げ検討することとする。

二

まず、現存する曼荼羅を取り上げ、降三世会の四隅には実際にどのような尊像が描かれているか、その点から見ることとする。ここでは現図曼荼羅の降三世会と、これに関連すると思われる八十一尊曼荼羅を取り上げる。

まず仁和寺版（御宝版曼荼羅）を大正大藏經圖像部の記述によって見れば、四隅の尊像について次のように記されている。

辰巳（東南）降三世金剛 如夏雨雲色

未申（南西）軍荼利金剛 如雷電之雲色

戌亥（西北）閻鬘德迦金剛 鬚鬘色

丑寅（北東）不動金剛 深海水波色

はじめに問題となるのは仁和寺版の曼荼羅には、実際には天女像が描かれているのに、この尊像に四大明王の尊名が記されていることである。ここではその理由を「四隅四大明王妃形尊口伝 安堵極楽寺本則忿怒形也⁽³⁾」と天女像は明王の妃であると説明し、さらに女尊形となっているのは口伝であり本来は忿怒形であるとする。すなわち何らかの理由で明妃が描かれるようになったとしたら、空海請来の現図曼荼羅もこの四隅の尊像は忿怒形であった可能性もあることになる。しかし現存するいくつかの、たとえば伝真言印曼荼羅・元禄版東寺曼荼羅・小島曼荼羅・長谷曼荼羅などは仁和寺版と同様に明妃形で描かれている。⁽⁴⁾

また真別処本種子曼荼羅、すなわち「金剛界大曼荼羅」を見ると、降三世会の四隅にそれぞれの尊像の種子が配され、その種子の隣に「降・軍、六・不」という文字が記されている。⁽⁵⁾ 言うまでもなくこれは、降三世（東南）、軍荼利（南西）、六足尊（西北）、不動（北東）の各尊を示すが、尊形ではなく種子で書かれているため明王であるとも明妃であるとも判別することはできない。また宝菩提院本の種子曼荼羅でも「金剛界大曼荼羅」と全く同じ記述がなされている。但しこれは降三世会ではなく、なぜか降三世三昧耶会に記されているのである。⁽⁶⁾

次に「八十一尊曼荼羅」について見ることにする。ここでは石山寺本と妙法院本の曼荼羅を取り上げる。これには

次のようにある。⁽⁷⁾

東南 南西 西北 北東

石山寺本 大威徳明王 馬頭明王 軍荼利明王 降三世明王

妙法院本 降三世明王 軍荼利明王 大威徳明王 不動明王

「八十一尊曼荼羅」では明妃ではなく、明王の姿で描かれている。しかも、同じ「八十一尊曼荼羅」の四明王といってもこのように尊名や位置関係に移動が見られるのである。

以上のことから、①明王と天女像の違いをどう見るか、②四大明王の尊名が必ずしも一致していないのはなぜか、③尊像の配置は何らかの意味があるのか、などの問題が提起されると考える。そしてこれらが「現図曼荼羅」と「八十一尊曼荼羅」とで何らかの影響があつたことなのか、併せて見る必要がある。

三

では以上のような点について、諸師は如何に決着しているのであろうか。まず次に、降三世会の四隅の尊に関する記述をあげ整理してみることにする。

『金剛界諸尊種子』安然 (841-915)

不動木、降三世木、軍荼利木、大威徳木。⁽⁸⁾

『智界私記』明達 (877-955)

東方角一・不動明王、東方角二・降三世明王、西南角・軍荼利明王、西北角・大威徳明王。⁽⁹⁾

『金剛界七集』淳祐 (890-953)

外院四角四忿怒共木。不動、降三世、軍荼利、大威徳也。⁽¹⁰⁾

『*kyōron*七集』興然 (1121-1203)

次四忿怒、東北角降三世、東南角六足尊、西南角馬頭、西北角軍荼利。⁽¹¹⁾

『覚禅鈔』覚禅 (1143-1217)

東北・烏菟沙摩、東南・軍荼利、西南・不動、西北・降三世。⁽¹²⁾

『胎藏界尊号(復金剛界尊号)』行宴 (1184-1200)

東南・降三世、南西・軍荼利、西北・閻鬘徳迦、北東・聖不動。⁽¹³⁾

『阿沙縛抄』承澄 (1205-1232)

降三世・巽、軍荼利・坤、閻鬘徳迦・乾、不動・艮。⁽¹⁴⁾

『両部曼荼羅私抄』澄舜 (1532-)

東南・金剛夜叉、南西・軍荼利、西北・大威徳、北東・不動。⁽¹⁵⁾

『金剛界曼荼羅尊位現図私抄』亮憲 (1534-1617)

木 不動金剛・丑寅 深海水波色。二拳腰安。

木 降三世金剛・辰巳 如夏雨色。左拳安腰。

木 軍荼利・未申 如雷電之雲色。安腰。右劍。

木 閻鬘徳迦・戌亥 雷電鬚鬣之色。左拳安腰。右拳當胸。⁽¹⁶⁾

以上一と二に挙げたものを整理すると、次のようになる。⁽¹⁷⁾

降三世会の四大明王を巡って

	東南	南西	西北	北東
現図曼荼羅	降三世金剛妃	軍荼利金剛妃	閻鬘德迦金剛妃	不動金剛妃
金剛界大曼荼羅	降三世明王	軍荼利明王	六足尊	不動明王
八十一尊・石山	大威德明王	馬頭明王	軍荼利明王	降三世明王
妙法	降三世明王	軍荼利明王	大威德明王	不動明王
金剛界諸尊種子	降三世明王	軍荼利明王	大威德明王	不動明王
智界私記	降三世明王	軍荼利明王	大威德明王	不動明王
金剛界七集	降三世明王	軍荼利明王	大威德明王	不動明王
『てんざう』七集	六足尊	馬頭明王	軍荼利明王	降三世明王
覚禅鈔	軍荼利明王	不動明王	降三世明王	烏菟沙摩
胎藏界尊号(複金剛界尊号)	降三世明王	軍荼利明王	閻鬘德迦	不動明王
阿沙縛抄	降三世明王	軍荼利明王	閻鬘德迦	不動明王
両部曼荼羅私抄	金剛夜叉明王	軍荼利明王	大威德明王	不動明王

ここで指摘できることは、明妃形あるいはそう考えられるものは、種子曼荼羅を含め現図系の曼荼羅ということができる。尊名に関しては、六足尊も閻鬘德迦金剛も大威德明王の異名同体であるからこれについては問題はない。しかし、「石山寺院版八十一尊曼荼羅」「覚禅鈔」「てんざう七集」及び「両部曼荼羅私抄」では、馬頭明王・金剛夜叉明王・烏菟沙摩明王が配されるなどの特徴がある。さらに「覚禅鈔」を除く他の三本では、降三世明王と不動明王の

入れ替えがあり何らかの意味をもつものと考えられる。

また方角に対する諸尊の配置も、東南より降三世明王・軍荼利明王・大威徳明王・不動明王と配される例が多いが、尊名に入れ替えがあるものに位置関係の異なりが顕著であることが知られる。

四

このように諸説が存在する中で、先徳はこの問題に関してはいかなる見解を有しているのか。次に、この点について些か検討してみたい。

『両部曼荼羅義記』には

問う、降三世会外院の四角に四天有り。是何の義なるや。答う、金界曼荼羅抄に云わく。降三世会外部廿天の外
の四角に四尊在すことは、覚海抄には古来より異義あり、之を知らず。(また)延命院の九会密記に、此の四尊
在すは古来より難儀。(さらに)内山六会六卷書には、降三世会に四尊四天明王の許有り。其の名字は指さず。

私案に云わく、成身会内院の四角には三古を置く。是れ鎮壇怒杵に習いて之を以て四大明王に配す。謂く降三・
軍荼・大威徳・不動なり。東南より順次之を配す。しかりとするは亮慧義の四大明王なり。この義宜か。但し天
形尊なり。四大明王に非ず。しかりと雖も成・三・羊・供・四・一・理趣・の七曼荼羅は、皆同じく鎮壇怒杵な
り。之に準じて降三世会外院の四角、其の位同なり。故に知んぬ、此の四天は鎮壇尊なり。余の成・三等の七曼
荼羅は自性、正報曼荼羅の故なり。教令輪の四明王を安ずるは鎮壇の義を表すと雖も、當曼荼羅は降三世教令輪
の故に鎮壇尊を四天に安ずるか。⁽¹⁸⁾

とある。ここでは降三世会が大日如来の教令輪を示す会であり、なおかつ最外の四角が鎮壇怒杵が描かれる場所

あるという理由から、四大明王が描かれたとする。この点については『阿沙縛抄』にも、「問う、四大明王、いかんが廿天位に安置するや。答う、是れ鎮壇の意なり。忿怒は外護の徳を兼ねる故に、曼荼羅の四角に置く。守護せしむるなり⁽¹⁹⁾」とある。しかしそれなのになぜ明妃を描くのか、ということは明確にしていない。またここには三輪身が説示され、五大明王との関連も考えられるが、この点については後で触れる。

さらに『両部曼荼羅私抄』には次のようにある。

第八降三世会 七十七尊

五仏・四波羅蜜・十六大菩薩・八供・四摂・賢劫十六尊・外金剛部二十天・加四隅四大明王。

問う、何の故に降三世会と名ずくるや。答う、諸尊は降三世羯磨身に住して、魔王を降伏する標示なり。問う、

四角の四明王に何んが降三世無きや。答う、降三世は總所入三摩地の故に別に能人の尊無きなり。⁽²⁰⁾

ここでの議論は、降三世明王を四隅の四明王の一つとして配しない理由についてである。すなわち降三世会は降三世明王の三摩地を示したものであり、あえて四隅に置く必要がないとする。そして四隅の面名や配置に関しては「私に云わく。四角四大明王の事。延命院はすでに未決と御釈す。然ると雖も大原の御口決に任せ、先ず其の名字を載す⁽²⁰⁾」

とし、あえてこれ以上の言及はしていない。また降三世明王の配置に関しては、慈雲尊者も見解を述べている。すなわち、

此の九会ごとの外金剛部の四隅に三古を画く。此を念怒三古と云う。此を四大明王と習う。即ち是れ降伏門の義なり。此の四大明王に異説あり。一つには不動・軍荼利・大威徳・金剛夜叉と習う。降三世は即ち是れ降三世会の主なるが故に除く。二には不動は大日の總徳、教令輪身の故に覗きて降三世を用う。今は初めの説に依りて、

後義を用いざるなり。⁽²¹⁾

とある。このように慈雲は二つの解釈があることを述べ、自身は第一の説の立場を取っているが、この中で降三世明王と不動明王が問題となることを指摘している。すなわち、「降三世会の主としての降三世明王」と「明王の主としての不動明王」という二つの考えの絡みだが、四隅の四明王の尊名の違いと関係することが知られる。それとともに馬頭明王や金剛夜叉などが選ばれた理由についても触れる必要があるであろう。

五

『撰無礙經』では、五智を以て次のように忿怒尊に配当する。⁽²²⁾

不動尊 毘盧舍那忿怒。 自性輪般若菩薩。

降三世 阿閼仏忿怒。 自性輪金剛薩埵菩薩。

軍荼利 宝生仏忿怒。 自性輪金剛王菩薩。

六足尊 無量寿仏忿怒。 自性輪文殊師利菩薩。

金剛夜叉 不空成就仏忿怒。 自性輪即寂靜身。 又穢積金剛為不空成仏忿怒。 自性輪金剛業也。 穢積即烏髻澁摩菩薩也。

無能勝 釈迦牟尼仏忿怒。 自性輪慈氏菩薩。

馬頭観音 無量寿仏忿怒。 自性輪観世音為主。 伴陀羅縛子尼白衣観世音菩薩也。

これまであげた降三世会の四隅の明王の尊名は、全てこの中に見ることができ、そして不動明王が明王の主となるといふ考えも、ここに「不動尊 毘盧遮那忿怒」とあることから窺うことができる。この記述は『秘藏記』⁽²³⁾にも全

く同じようにある。しかしここには、これらの明王を方角的に位置づける記述はない。だが『攝無礙經』には、これとは別な箇所四大明王を次のように四隅に位置づけている。また『仁王般若經儀軌』には、四隅ではないが、方角と関係づけて明王を配する記述があるので、併せて見ることとする。すなわち、まず『攝無礙經』には、

東北・閻鬘德迦 頂上火鬘髻 迅雷玄雲色 六面一八眼 極大忿怒相
東南・無動尊 髻上八蓮葉 頂髮垂右肩 一目而諦觀 面門水波相
西南・降三世 鬘髻火髻冠 夏時雨雲色 三面三三眼 阿吒吒微笑
西北・軍荼利 髮髻鬘髻冠 雷電黑雲色 三目怖畏相 八臂操器械⁽²⁴⁾

とある。さらに『仁王般若經儀軌』には、

東方・金剛手菩薩 降三世明王
南方・金剛宝菩薩 軍荼利金剛
西方・金剛利菩薩 六足金剛
北方・金剛棗叉菩薩 淨身金剛
中方・金剛波羅蜜菩薩 不動金剛

とある。これらの記述によって明王が四方あるいは四隅に配される例が多いことが知られる。しかし『攝無礙經』に示された方角は、これまでとはまた異なった位置を示しているように、明王の位置は必ずしも確固たるものではないことが知られるのである。

六

以上のことから現図曼荼羅の四隅の尊像に関する日本の展開を見ると、明王を置くという考えが基本的に共通している。そしてその多くは、東南、降三世明王、南西・軍荼利明王、西北・大威徳明王、北東・不動明王とされる。しかし尊名や位置関係が異なるものは、『攝無礙經』や『仁王般若經儀軌』などの考えの影響も見られるとともに、「八十二尊曼荼羅」とも関連性があると思われる。しかし「八十一尊曼荼羅」はむしろ「成身会」と近いので、当然金剛薩埵は降三世明王に変身していない。それ故、「降三世羯磨会」に降三世明王が二体登場することにもなる。このように混乱があるのは、少なくとも日本においては、四隅の尊像が何であるかを示す明確な教証が無かったことに起因すると思われる。「降三世羯磨会」の四隅の尊の教証については、今後さらに研究することとしたい。

さらに取り残した問題として、「降三世羯磨会」四隅の尊に関わるもう一つの説である。すなわち、梅尾祥雲博士はこの明妃形について「釈迦彌恒羅や慶喜蔵の説明する所によると、此は陪羅縛 (Dhairava)・吉祥天 (Sri)・弁財天 (Sarasvati)・橋履 (Gauri)との四明妃である」とし、明王ではない考えのあることを述べている。現図曼荼羅に明妃形が描かれてる事実は厳然としてあるわけであるから、さらにその根拠を探り検討する必要性は十分ある。しかしこの問題について先の問題とともに今後の課題としたい。

注

- (1) たとえば胎藏曼荼羅の除蓋障菩薩の位置の問題、あるいは
 (2) 大正七八・七二・上。
 (3) 大正・図像部一・一〇二。
 (4) 大村西崖『三本両部曼荼羅集』

- (5) 大正・図像部一・五七一。
- (6) 大正・図像部一・五八四〜五百八五。
- (7) 石山寺は大正大藏経図像部一別紙参照。妙法院本は図像部二別紙参照。なお『密教大辞典』の記述には妙法院版では「不動・軍荼利・降三世・金剛夜叉」としているが、このうち金剛夜叉は大威徳の誤りではないかと思われる。
- (8) 大正・図像部二・七五四。
- (9) 大正・図像部二・九一〇・上。ここで東方一と二という記述がなされているが、流れから見ると恐らく東北が不動・東南が降三世と思われる。
- (10) 大正・図像部一・二〇二・中。
- (11) 大正・図像部一・四五三。
- (12) 大日本仏教全書・五四・二七六・上。
- (13) 大正・図像部一・四五九。
- (14) 大日本仏教全書・五七・二三一・下。
- (15) 大正・図像部二・一〇二六・中。
- (16) 大正・図像部二・一一四五・下。
- (17) この四大明王については、小野玄妙『仏教芸術著作集』第九巻・五六七―五六八。にも幾つかの例が示されている。
- (18) 大日本仏教全書・四四・八五・上下。
- (19) 大日本仏教全書・五七・二三一・下。
- (20) 大正・図像部二・一〇二六・中〜下。
- (21) 『両部曼荼羅随聞記』（慈雲山尊者全集）第八巻）一七六頁。
- (22) 大正一九・五一四・上〜五一五・上。
- (23) 『秘藏記』では、『攝無礙経』の「自性輪即寂靜身」を「自性輪即牙菩薩。是寂靜身也」としている。大正・図像部一・一〇・下。
- (24) 大正二〇・一三三・中・下。
- (25) 大正二〇・一三〇・上。
- (25) 梅尾祥雲『曼荼羅の研究』三四五頁。